小さいけれど スゴい能力!! 赤ちゃんの不思議

ひ弱で、何もできないように見える赤ちゃん。でも、その小さな体の中には、成長して活動するためのエネルギーが秘められています。赤ちゃんについて考えていくことで、動物と人間の違いや、人間のすばらしさが見えてきます。

取材協力／生命の星・地球博物館
広谷浩子
取材・文／山村紳一郎
CG/山崎フミオ
イラスト/有留ハルカ

さまざまな赤ちゃん

赤ちゃんとは「赤ん坊」「赤子」のことです。皮膚が透き通っていて、ほおが赤く見えることから、この言葉があるようです。人間の場合は、1歳未満の乳児、つまり、ものを食べる能力がなくてお乳で栄養をとっている段階や、離乳（乳離れすること）前後までの子供を指しています。他の哺乳動物の場合も同じように、産まれてから離乳までが赤ちゃんといえます。

ただし、哺乳動物以外の鳥類、魚類、爬虫類などはそもそも乳を出しません。このため乳児という段階はないのですが、親からエサをもらっている段階や、単に産まれたばかりの子供（幼体）のことを、一般的に赤ちゃんと呼ぶことがあります。

「でも、ひとくちに赤ちゃんといっても、動物と人間とでは大きく違いますし、動物の中でもいろんな赤ちゃんがいるんですよ」

というのは、霊長類の子供に詳しい生命の星・地球博物館の広谷浩子さんです。

ツバメのヒナは、鳴き声や開けた口の中で、親ツバメにエサを与える行動をうながしているといわれます。

哺乳動物以外では、オタマジャクシとカエルのように、親（成体）と子（幼体）の姿がかけ離れている場合があります。けものの仲間でも、人間に近いサルや、イヌ、ネコなどは、親と子はよく似ていますが、中には親とは別の動物に見えるような赤ちゃんもいます。

たとえば、カンガルーなどの有袋類やパン